人文地理学研究　**34**　2014　1–2

フィールドワーク方法論の体系化

― データの取得・管理・分析・流通に関する研究 ―

村山祐司

キーワード：人文地理学，データ，フィールドワーク，分析，方法論

『人文地理学研究』第34巻は，フィールドワーク方法論の特集号である．2010年度から2013年度にかけて実施した科学研究費補助金基盤研究（A）「フィールドワーク方法論の体系化－データの取得・管理・分析・流通に関する研究－」（研究代表者：村山祐司（筑波大学），課題番号：22242027）の成果の一部をとりまとめたものである．

フィールドワークは，個人やグループで現地に赴き，その地域の自然や人間活動について調査することであり，現地調査や地域調査，野外調査とも呼ばれる．フィールドワークは人文地理学，社会学，文化人類学，経済学，地域研究，社会医学，さらには自然地理学，地学や地質学，生態学など，人文・社会科学から自然科学まで幅広く行われている．調査の方法は，聞き取り，インタビュー，アンケート，参与観察，景観観察，資料収集，観測など多岐にわたる．学問分野によって，フィールドワークの対象や方法論に違いがみられる．人文・社会科学では，聞き取り，インタビュー，アンケートなどの手法が用いられるが，自然科学では，景観観察，現地での観測や実験などが好んで利用される．対象も学問分野によって異なる．政治学や地域研究が対象とする領域は広く，スケールでみれば，マクロ的レベルにフォーカスすることが多い．被験者に注目すれば，社会学では社会集団を，民俗学や文化人類学では個人や少数のグループを対象にすることが多い．文化人類学では，現地での滞在期間が長く，時には１年を超えて滞在し，個人を対象に継続的に参与観察や聞き取りを実施することも珍しくない．自ずと対象地域は生態や生活がなされる集落単位となる．

人文地理学のフィールドワークは人文・社会的事象を扱いながらも，環境・生態的視点をもち，空間的思考を重視する点に特徴がある．人文地理学者は，聞き取り・アンケート・観察・観測など様々な方法を駆使して地域データを収集する．

フィールドワークは，経験や職人芸的な感性（職人技）に負うところが大であり，取得データの分析や処理は試行錯誤的に進められることも多い．専門や調査地を異にする研究者にとって，フィールドワークはいわば「ブラックボックス」と化している．このため，研究の手続きが一人一人の力量に委ねられ，研究者同士が議論をして調査手法を洗練させる，あるいは情報を共有するといった発想や試みはこれまであまりみられなかった．このような背景を踏まえ，本プロジェクトでは，人文地理学者が培ってきた豊富なフィールドワークの経験や蓄積にもとづき，暗黙知とされてきたフィールドワークを体系的に整理することにより，方法論の「ホワイトボックス」化に挑んだ．

これまで個々の研究者がフィールドワークで独自に収集してきたデータは，当該研究者にその利

用がとどまっていた．膨大な時間と労力を費やし作成された貴重なものにもかかわらず，他の研究者に再利用されることはほとんどなかった．チームを組んで実施する共同研究においても，研究が終了すると個別データは破棄されることが常であり，次の研究や他のグループに受け継がれることは稀であった．集計や整理の仕方が個別的かつ非系統的であるため，汎用性が低いのがその主たる原因である．

本研究を効果的に推進するには，研究分担者間で問題意識をシェアし，絶えず意思の疎通が図れるようにすることが肝要である．この点を考慮し，本研究では日常的に連携が緊密にできる筑波大学内の研究者でメンバーを編成した．９名の人文地理学者で研究そのものを遂行するノウハウや研究論文の論旨を組み立てる方法などにも注意を払いつつ，データを系統的に取得・蓄積・管理・分析・可視化・伝達する汎用的方法を追究した．「ホワイトボックス」化を試み，研究者間でフィールドワークの技法や手順が共有できる仕組みを構築し，アイデアの交流，データの交換，分析手法の双方向的な活用などを検討した．

英文タイトル

Systematization of Fieldwork Methodology:
A Study on Capture, Management, Analysis and Circulation of Geographical Data

MURAYAMA Yuji